

評価によせて

理事 北海道教育大学助教授 佐藤 有

夏休み目前の暑い土曜の午後のことである。息子の野球の応援のため小学校の校庭に出かけると、幾人かの子どもたちが職員室をのぞきながら「あつ、あゆみだ。あゆみだ。」と声をあげていた。机にのせられてある「あゆみ」を見つけたのだろうか、幾人かの先生の姿が見られたが「あゆみ」をつけておられていたのだろうか。

この時期、教師は子どもたちに少しでも良い成績を、少しでも勵ましを、と多大なエネルギーを使う。また子どもたちも、親たちも胸の高まりをもってそれを手にする。

ところで今年は私自身も評価をされる立場におかれてしまった。大学院設立のためである。当然のことながら職場では設立の賛否をめぐっての話し合いがもたらされた。その際、よく話題になったことは一体審査の基準は何かということであった。その折り、評価の困難性ということで私が思い浮かべたのは夏木悠介の次のエピソードである。

「アフリカの原住民に衛生思想を普及するための啓もう的映画をみせたあと、『あなた方はこの映画で何を見ましたか』と質問すると、30人ほどの回答者はすべてただちに『ニワトリを見た』と答えた。映画を見せたイギリス人たちにはそこにニワトリなど写っているおぼえはない。念のためにもういちどひとまず注意深くみてゆくと、ある場面でニワトリが画面の右下を横切ってゆくのが写っている。原住民たちは彼らが関心を持っているこのニワトリだけを『見た』のだ。一方、映画を見せた側では、だれひとりニワトリなどは『見て』いなかった。」（『気流の鳴る音—交響するコミュニケーション』、筑摩書房、1977）

つまり私たちは同じものを見ても、同じものを見ていない（同じく見ていない）ということ、また一面的にしか（「図」を見て「地」を）見ていない傾向がつよいということである。「～学派」「～流派」という言葉があるが、これはスクール（school）ということであり、ある一つの（考の）の群れということである。ある群れの立場から他の群れの考え方を相手に不利にならないよう評価することは困難な作業となる。

結果として文部省へ提出を求められたものが履歴書、業績一覧表であり、業績については現物の

コピーも求められず著書・論文名、出版社、出版年月の明記ということであった。では一体何をもって評価するのであろうか。博士号の有無、著書の有無、20本以上の論文数、最近5年間の業績、学会誌・中央の雑誌への論文数といった中で幾つかの条件を満たすこと、ということらしい。内容を読まないのであるから一面的・形式的な評価基準によっていると考えざるえない。

ところでさまざまな可能性を秘めた子どもたちに対しては一面的・形式的評価があつてはならない。だが、繰り返しになるが人を評価するということは容易なことではない。

先にあげたような、評価者間の観点の相異だけでなく、ある評価者に焦点をあてたとしてもである。例えばある部屋に花瓶がおいてあるとする。だがその人はいつも同じ花瓶を見ているのではない。その人はいつも全く同じ位置に座り同じ視点から見るということはありえず、また同じ自然条件（明るさ、暗さ）で見ることはないからである。見る人自身が変化しつつある存在であるからである。これが花瓶ではなく子どもたちの場合、活動的であり、刻々と変化する。さらに教師と子どもたちは相互に作用し合う。きわめて複雑で混質的な（見方によっては豊かな）世界となる。

複雑で混質的世界故、私たちは分析という方法で、評価領域に適合する（と思われる）諸要素を抜き出したり、それらを相互に関連づけることにより、評価領域固有の場を固め、数量化をおしすめる。が同時にそれは、現実の総体としての一人ひとりの子どもの世界からの遊離、仮説的世界フィクションの世界への移行ということである。（そこは等質のまとまりをもった操作に都合のよい世界ではあるが。）そこでいまいちど現実の複雑で混質的な世界へとたちもどることを要請される。

そうしたことを承認したことだが、果たして「等身大」の評価ということはありえるのだろうか。おそらく否であろう。それでよいのかも知れない。一人ひとりの可能性を伸ばすようなズレを含んだ評価であるならば。

第7回 全個教連夏季研修会

【テーマ】 新指導要領と個性化教育のあり方
—— 個性を生かす学習環境 ——

【期日】 平成3年7月25日(木)～27日(土)

【会場】 上智大学・根岸小学校・上野小学校

今年の夏季研修会は、東京西多摩の上智大学をメイン会場に、5つの講演・課題研究協議・分科会・施設見学・懇親会などが行われた。暑さの厳しい中、全国から100名を越える参加者があり熱気に満ちた話し合いが繰り広げられる充実した3日間だった。

—— 第1日(25日午後) ——

■講演① 「個性化教育と教師の役割」
北海道教育大学助教授 佐藤 有先生
まず、「教える」という行為の見直しを求め、「学習者の活動援助型教師」であるべきだという。また、専門家としての識眼——存在するものと存在するかもしれないものの関係を可能性のうちにとらえる力——を養うこと、さらに、潜在カリキュラム——公正さ、ユーモア、明るさ、若さ——にも配慮する教師でありたいと話された。

■講演② 「個性的成長をめぐって」
名古屋大学助教授 浅沼 茂先生
まず、個性を「主体性」と「主観性」に分けてとらえ、生き方、経験の流れ、出会いといった形で個性的成長がみられるという。続いてアメリカのカリキュラム改造運動にふれ、タイラーらによる「行動目標」の設定は、実は問題解決力といった高次な能力を測りたいという願いから始まつたもので、ブルームらの解釈と日本への導入は人間の個性的成長をあまりにも単純な行動主義的なものへと導いていった、と指摘された。

■課題研究協議 《学習環境について》
提案者 並木 康成先生(神奈川・太磧小)
佐久間茂和先生(東京・精華小)
松田早苗先生(千葉・酒井根東小)

人的環境として、チーム・ティーチングの良さや実践するにあたっての留意点、地域教育力の活用について、物的環境として、児童が働きかける学習環境・児童に働きかける学習環境、空き教室

の活用について、実践例をもとにした提案がされた。これは日頃の悩みの解決につながる興味深い内容で、質問も多く出て活発な話し合いが行われた。

—— 第2日(26日) ——

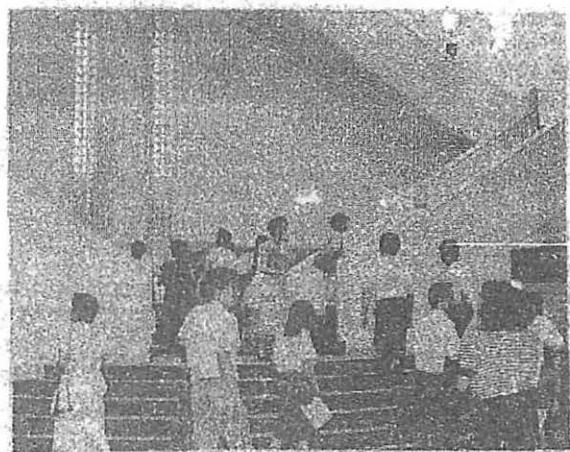
【午前】 ■自由研究協議

《第1分科会》 個人で取りくむ個性化教育
提案者 石沢 寿子先生(青森・北陽小)
加藤 勇先生(埼玉・亀井小)
谷口 育史先生(兵庫・霞ヶ丘小)

ボランティアを学級で活用した学習、ワークシートなどをを使った学級での個別学習についての実践が報告された。個人で取りくむまでの苦労話も出されたが、前向きな姿勢で取りくんでいる先生方の熱意が伝わってくる内容だった。

《第2分科会》 学校ぐるみで取りくむ個性化教育
提案者 静岡・初倉南小学校
福島・岩江小学校
山梨・龍王東小学校

児童が自ら学んでいく力を育成しようと学校全体で取りくんでいる研究の様子が、様々



2日目 上野小学校にて

《参加者の声》

今回大変多くの方から感想をお寄せいただきました。ありがとうございました。

参加された方は研修会を思い出しながら、参加できなかった方はどんな研修会だったかを知る参考として御覧下さい。

現在1年生と3年生の2名そして私、3人だけの分校生活をしています。敵が少なくて理想的な教育・学習ができますねとよく言われます。でも教授・画一化の教育に慣れた頭と体はなかなか転換できません。個性重視の教育・学習が叫ばれ続ける中で、全国で活躍されておられる諸先生の実践・研究に触れさせて頂き、今までの私の実践や子供に対する視点も再検討せねばと思っております。私自身の発想の転換の第一歩となりました。

まずは“たった二人”的子供を前にしての実践に取り組みたいと思います。

山形県 雨田 幸先生

夏季研修の内容が、課題研究（人的、物的ソフト、物的ハード）、自由研究、施設見学、講演、討議と多様で、数多い研修会の中でも特に有意義なもの一つだと思います。東北地区から8名なのでもっと広報活動に力を入れ、多くの若い先生方に参加していただきたいと思います。

秋田県 佐藤 真先生

私の勤める学校も個別化、個別化の研究に取りくんだばかりですが、あらためてその重要性に気付かされました。日頃いかに生徒たちの力の一面しか捕らえていなかったか、あるいは教育てるということの意味の深さをいかにとらえていなかったか反省させられました。今後微々たる力ではありますが学校へ子供へ還元できるよう頑張りたいと思います。

埼玉県 進藤 康秀先生

各国の学校の様子を知る事ができ、とても貴重な経験でした。

子ども一人一人を大切にするということは頭でわかっていても、毎日の学校生活の中で自分はどう

れだけできているのだろうかということを考えながら三日間を過ごしました。

千葉県 栗原 裕一郎先生

3日間でチームティーチングの話や先進校での研究についてなど、これから参考にしていくと思うことがいろいろありました。

オープンスクールというのは校舎の形態だけではなく、個別化・個性化を目指した学習法であることがわかりました。この3日間で学んだことをこれからの自分の実践に少しでも生かせたらと思います。

千葉県 山田 恵子先生

本年度新設されたオープンスペースを有する本校に着任し、今日まで施設活用・授業のあり方について迷い悩んで来ました。この研修会に参加しその迷いや悩みが少し解消されました。広いスペースを活かし、もっと児童にいろいろな活動をしてもらえるよう自分自身工夫をするとともに児童にアドバイスしていきたいと思います。

千葉県 清田 成子先生

高浦先生や佐藤先生のお話を伺い生活科で個性化教育を推めようと強く思いました。子ども中心主義ということを考えれば、そうしなければとも思いました。スライドや映像での発表はとても身近なものとして受け取れるのでありがたく思いました。3日間で固定概念が少しやぶれるような思いにもなりました。

千葉県 中嶋 田鶴子先生

2日目のオープンスクールの見学が、自分にとっては大変印象に残りました。また、個別化・個性化ということが全くといっていいほどわからなかつた自分にとって、一筋の光が見えてきた思います。できれば児童の活動する姿も見られればよかったです。

千葉県 矢部 哲男先生

今回個性化の研修に参加し感じたことは「これからは個性化中心の教育になる。」と常々聞いていたことが、もはや定着しつつあり、そうしてい

かなければならぬということが明らかになった
ということである。本校にもワークルームと呼ばれる
スペースがあり、これをいかに活用するかが課題とな
っているが、実践校の様子を見せていただき「これは何とか本校にも活用できそうだ。」と思われるものもあり、また、ファイルでの資料保存の仕方地域の人々の協力の得方など大変参考になつた。

千葉県 田邊 尚子先生

大変有意義な3日間でしたが特にオープンスクール・インテリジェントスクールの見学と高浦先生に伺った「生活科の評価」のお話が興味深いものでした。この研修で学んだ若い目で見た学習者中心主義、個性尊重の様々な試みを是非自分の学校に投げかけていきたいと考えています。

東京都 石川 和広先生

（以下略）

教育を変えようと現場ではお互いに口ぐせにしているのに、いざ何をどのように切り込むか具体的なイメージがわかないのが現状だと思います。加藤先生、高浦先生、若い先生方の実践記録等を読ませていただき、目前の雲が晴れた感じがしました。またこの度の研修会から一層確信いたしました。

東京都 小林 和子先生

どの講演内容もこれから実践に大変参考になりました。なぜ個別化教育を推進しなければならないかをもっと研修し実践したいという課題もいただきました。学習環境作りやT.Tの組み方、自己評価の手立てなど今かかえている沢山の課題に対しても同じように悩んでいる課題であることわかり大変参考になりました。

神奈川県 鈴木 マリ子先生

中学では「生徒理解を基本として」とよく言われるが、その言葉が日常では表面だけで流されてしまっているのではないかと思う。この3日間の研修に参加し、その言葉の真の意味を再度確認した。その中で個別化、個別化教育というものは、これから私のやりがいを与えてくれた感じがした。

神奈川県 稲葉 茂先生

初めてこの研修会に参加させていただきましたが、研究を進めておられる各校の実践発表は、本校の研修との共通する部分もあり参考になりました。研修の進め方や研修組織についての発表がよかったです。3日目の講演では日頃聞けないような先生方の話を聞くことができ、よい勉強になりました。もう少し講演を聞く時間が長くてもよかったです。

山口県 中村 真理子先生

学年、学級、個人の作る資料はたくさんある。それをいかに積み上げ引き継いで活用していくか1学期に話し合いをもち、ファイルを学年ごとにそろえた。が私有財産的な資料を出したがらない雰囲気がある。みんなを納得させようなお話を資料に出あわせて大変有意義でした。

インテリジェントスクール、生涯教育では「百聞は一見にしかず。」を実感。

オープンスクールの世界の流れにふれ、スライド等で学べたことも大変よかったです。

沖縄県 泊 勤子先生

人的環境からの発表、物的環境からの発表は、私達の環境からの個別の可能性を広げてくれたような気がします。内容から学んだものを自分の活動のヒントにできればと思っています。最後に、個別とは新しいことをどんどん導入するのではなく、子どものために大切なものを用意してあげるものだと思いました。

沖縄県 佐次田 誠先生

自分がこれまでもっていた教育観、学習観、教師観がガラガラ音をたててくずれるくらいのカルチャーショックを受けた研修会でした。

いい先生とは？勉強とは？疑問で頭の中がいっぱいです。小さなすき間からのぞいていた世界にドアを開けて外に出されたみたいにとまどってます。保身にならずに、この研修会を期にかわりたい。

沖縄県 屋嘉比 邦昭先生

（誌面の都合上、全文は記載できませんでした。
ご了承下さい。）

な実践事例をもとに報告された。自由学習や課題解決の学習、基礎的なスキル学習、異年令集団活動など興味深い内容だった。

《第3分科会》 中学校における個性化教育

提案者 愛知・上野中学校

埼玉・城北中学校

城北中の発表は教科指導に、上野中のそれは特活領域に焦点があかれ、二つの発表を通して今日の中学校における個性化教育のあり方が浮かび上がった。例年なく30名の参加者があり、関心が中学に移りつつあることがわかる。2年後に新学習指導要領—教科での波形の運用と選択教科の導入—の実施をひかえ、私たちとしても中学校における個性化教育のあり方に関心をもち、全国的な拡張をめざしたい。

〔午後〕 ■施設見学

* オープンスクール <根岸小学校>

3年生のオープンスペースで、オープンスペースを使った授業の計画・準備・授業の様子をビデオで見たり話を聞いたりした後、校内を見学した。4クラスずつの各学年のオープンスペースは年間通して掲示し完成させていくものもあるが、おおかたは単元によって活用方法が変化する。学習環境の充実という面でも大変参考になる見学だった。

* インテリジェントスクール <上野小学校>

オープンスクールと同様、学習・生活の個別化個性化を実現する施設であるとともに、生涯学習の拠点としての施設でもある。また、高度情報機能を取り込んだ施設であり、人間的で豊かな生活環境としての施設であるという特徴もある。今年4月に落成したばかりの新しい建物だ。併設されている社会教育センターのホールで学校の概要を聞いた後、校内を見学した。様々な試みを目の当たりにし、新鮮な感動とともに「これからの学校のあり方」について考えさせられた見学だった。

■講演③ 「新しい学校建築」

東京都立大学助教授 上野 淳先生

インテリジェントスクール第1号の上野小学校のすばらしい会場でお話を聞くことができた。

上野小学校の建築計画のねらい、建築プロセスについてお聞きするとともに、先生が長年に渡って取ってこられたイギリスのオープン・スクール

(インフォーマル・スクール)のスライドを沢山見せていただいた。けっして豪華という訳ではないが、子どもたちの立場から作られたいいろいろな空間は、実に見事であった。イギリスにおける長い伝統を知らされた。

——第3日(27日午前)——

■講演④ 「生活科の評価について」

国立教育研究所室長 高浦 勝義先生

なんといっても、生活科の評価は大きな問題である。高浦先生は10月に黎明書房より『生活科のための評価の進め方』という本を出される。今回も、指導と評価の一体化など生活科の評価に対する考え方について具体的に話された。なお、秋には本会で、高浦先生を中心として、『生活科の評価』について研修会をもつ予定である。さらに深まった話し合いができると思う。

■講演⑤ 「今日における『単元学習』の

意義と課題」

東京大学助教授 佐藤 学先生

上野淳先生がイギリスのオープン・スクールのスライドを沢山見せてくれたが、偶然にも、佐藤先生はアメリカのオープン・スペースのスライドを沢山見せてくれた。そのさい、スペースでの「学習環境」の構成の様子を丹念に見せていただいた。オープン・スクールは欧米においては衰退の方向にあると言わながら、実は、「いいオープン・スクールはやはり健在である」ということを確信させてくれた。先生の足をつかった情熱的な取材に脱帽した。

第17回夏季研修会



3日目 講演⑤ 佐藤 学先生

◆◆◆◆◆ 韓国のオープン教育 ◆◆◆◆◆

韓国からも泳瀬国民学校長の朴性芳先生が3日間参加して下さった。1日目には、課題研究協議の後特別のプログラムとして韓国のオープン教育の様子の講演をしていただいた。

今年4月「韓国オープン教育研究会」が発足するまでにいたった韓国でも、ここにいたるまでの道のりは長かったようである。現場の先生方が、試行錯誤しながらオープン教育の良さ・大切さに気付いて意欲的に実践してくれるようになるのを朴先生は何年もかけて見守ってこられた。こうした韓国のオープン教育の経過や現在の様子を話を聞いたりビデオを見たりし、感動的で有意義なひとときだった。

◆ お 知 ら せ ◆

前号で新理事のお知らせをしましたが、その後変更および訂正箇所がありました。

東海個研では下記の方々が新理事に決まりました。よろしくお願ひいたします。

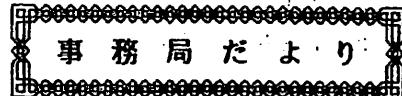
会長 新美一成（愛知 東浦町教育長）
副会長 村田武男（静岡 島田市教育長）
〃 吉村豊（岐阜 池田小学校長）
〃 佐野文治（愛知 弥富北中学校長）
理事 青木克夫（愛知 稲武町教育長）
〃 金田喜兵衛（愛知 稲武小学校長）
〃 田口芳宏（岐阜 東白川村教育長）
〃 蔵角秀吾（岐阜 大垣北中学校長）
〃 岩間隆義（岐阜 摂斐小学校長）
〃 鈴木茂（静岡 初倉南小学校長）
〃 増田智治（静岡 初倉小学校長）
〃 古木米治（静岡 六合中学校長）
〃 森季彦（三重 第一小学校長）
〃 鹿谷信（愛知 片原小学校長）
〃 安藤惣（愛知 卵ノ里小学校長）
〃 榎原七太（愛知 石浜西小学校長）
〃 魚住忠久（愛知教育大学教授）
〃 竹内透夫（金城学院大学教授）
〃 野村延吉（前常磐東小学校長）

監査 横山謙二（愛知 森岡小学校教諭）

監査 成田幸夫（愛知 上野中学校教諭）

事務局長 坂恒雄（愛知 緒川小学校長）

* 尚、全国と九州の新理事の方々の訂正是今回記載できませんでした。名簿（平成3年度版）に訂正して記載しておりますので、そちらのほうをご覧下さい。名簿は10月に発送の予定です。



全国各地から大勢の方々に参加していただき、第7回夏季研修会も盛況のうちに終わりました。

今年の夏の中では大変暑い3日間でしたが、その暑い中皆さん實に熱心に耳を傾け、話し合い、見学されていました。個性化教育を新鮮に真剣に受け止め、これから実践に生かしていくこうという意気込みが（参加者の声）（別紙）からも感じられました。これは、今回研修会を運営してきた事務局としても大変うれしいことです。

講師の先生・提案者の先生・運営のお手伝いをしていただいた東海個研・九個研の先生方、そのほか多くの方々にお世話になりました。皆様のご厚意に心より感謝いたします。

来年の第8回夏季研修会は、沖縄で行う予定です。是非またご参加下さい。

本年度の会費（個人3000円、団体5000円）
未納の方は、至急納入願います。

口座番号 東京0-194394

加入者名 全国個性化教育研究連盟

（事務局への問い合わせ・連絡先）
〒114 東京都北区赤羽南1-16-2-504

庶務部長 佐久間茂和

☎ 03-3903-4780

全国個性化教育研究連盟会報 第19号

平成3年9月20日発行

編集責任者 事務局長 高浦勝義

編集 広報部 五十子晴美